

鉄鋼概況

七〜九月期粗鋼需要 外需伸び悩みで減少見通し

鉄鋼エコノミスト 左近司 忠政

五月末の普通鋼鋼材国内在庫（メーカー・問屋段階）は前月末比四・三％増、在庫率は前月末比〇・一ポイント上昇し一二八・〇％となった。六月の粗鋼生産は、前年同月比三五・九％増で八カ月連続の前年同月実績超えとなった。六月の鉄鋼貿易統計で輸出（全鉄鋼ベース）は前年同月比三四・三％増で異例の高水準となった。経済産業省による二〇一〇年七〜九月期の粗鋼需要量（出荷相当）見通しは、外需にややブレキがかかることから前期比四・三％減と二期ぶりの減少となった。国内高炉大手四社合計の二〇一〇年度設備投資金額（連結）は前年度比〇・二％減と、国内製鉄所の能力増強の一巡などを背景に二年連続で減少する見通しである。JFEスチールは六月末にインドの有力高炉メーカーJSSWスチール社に資本参加することを発表した。世界鉄鋼協会（WSA）が発表した六月の世界六六カ国粗鋼生産は前月比四・七％減と二カ月ぶりに減少した。



◆二〇一〇年上半期鉄鋼輸出、過去最高

鉄鋼連盟が発表した五月末の普通鋼鋼材国内在庫（メーカー・問屋段階）は、前月末比二〇万九〇〇〇トン（四・三％）増の五〇三万六〇〇〇トンと二カ月連続で増加した。在庫率は前月末比〇・一ポイント上昇して一二八・〇％となった。一方、五月末の普通鋼鋼材の流通在庫は鉄鋼連盟が行なった全国市中鋼材数量調査によると、前

月末比八万トン（三・一％）増の二六三万トンとなった。五月の販売量は前月比五・三％減の二四三万トンとなった結果、在庫率は前月末比八・八ポイント上昇して一〇八・二％となり三カ月ぶりに一〇〇％の大台を超えた。主要品種の在庫状況をみると、五月末の薄板三品（熱延・冷延・表面処理鋼板）の国内在庫（メーカー・問屋・コイルセンターの合計）は、前月末比一三万八〇〇

〇トン増の三六三万六〇〇〇トンと二カ月連続で増加した。在庫率は前月末比〇・四カ月分増加して二・〇六カ月となった。五月末は過去一五年の平均で一〇万トン程度増えているが、今回は増加幅が大きかった。主要建材製品であるH形鋼の六月末の全国流通在庫は、新日鉄系建材特約店組織である「ときわ会」の調査によると、前月末比一万二九〇〇トン、六・六％増の二〇万九三〇〇トンと三カ月連続して前月を上回った。在庫が二〇万トン台となったのは五カ月ぶりである。国内の建設需要は極めて厳しい状況が続いており、出庫量がかつてない低水準に落ち込んだ結果の在庫増である。

鉄鋼連盟が発表した六月の粗鋼生産は、前年同月比三五・九％増（前月比では稼働日数により三％減）の九三五万二〇〇〇トン（年換算一億一三八〇万トン）となり、八カ月連続で前年同月実績を上回った。炉別生産では、転炉鋼が前年同月比三八・七％増の七二二万六〇〇〇トン（八カ月連続増）、電炉鋼が同二七％増の二一三万六〇〇〇トン（七カ月連続増）となった。一〜六月の累計生産量は五四五万トンで、生産低迷が続いた前年同期の約一・五倍となり、四〜六月期は前年同期比四七％増の二八〇六万であった。

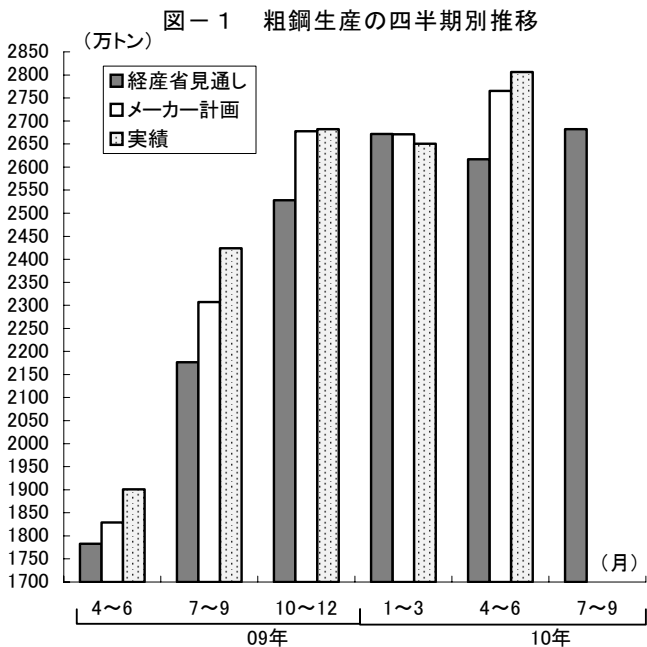
財務省が発表した六月の鉄鋼貿易統計では、輸出（全鉄鋼ベース）は前年同月比三四・三％増の三八二万七〇〇〇トンとなり、近年の六月の輸出量では二〇〇六年に記録した三三七万六〇〇〇トンを上回る異例の高水準と

なった。輸入も同二・六倍の六七万六〇〇〇トンと六カ月連続で前年を上回った。国別輸出では、最大向け先の韓国・台湾のアジアNIEs諸国向けが一五二万八〇〇〇トン（前年同月比三四・六％増）、ASEAN向けが九万九二〇〇〇トン（同六四・八％増）、中国向けが六八万七〇〇〇トン（同一〇・八％増）と、主力のアジア向けがいずれも堅調だった。アジア以外では米国向けが一五五〇〇〇トン（同二五・二％増）、中東向けが八万九〇〇〇トン（同五・一％減）、EU向けが五万四〇〇〇トン（同四三・二％増）、ロシア向けが三万九〇〇〇トン（同一三倍）と中東向けを除き増加した。国別輸入ではアジアNIEsからが三一万六〇〇〇トン（同八一・一％増）、中国からが一六万五〇〇〇トン（同四・五倍）、ロシアからが二万六〇〇〇トン（同二〇倍）だった。二〇一〇年上半期（一〜六月）の鉄鋼輸出は二一八四万九〇〇〇トンと前年同期比六〇・八％増となり、二〇〇八年上半期の二〇〇二万トンを超え過去最高となった。上半期の鉄鋼輸入量は三三八万四四〇〇トンと前年同期比八八・七％増加した。

◆七〜九月期粗鋼需要が二期ぶり減、経産省見通し

経済産業省が策定した二〇一〇年度第2四半期（七〜九月期）の粗鋼需要量（出荷相当）見通しによると、前期比一二〇万トン、四・三％減（前年同期比二五八万トン、一〇・七％増）の二六八二万トンと二期ぶりの減少

となった。国内需要は自動車や建設機械が堅調で前期比二・四％増と二期ぶりに増加するが、全需要の三六％を占める輸出が五・四％減と六期ぶりに減少する見通しである。中国の自動車生産が五月に二カ月連続して前月を下回るなど、拡大してきた需要にややブレーキがかかっている。中国の鋼材の在庫増や市況軟化、円高による採算悪化などで輸出が伸び悩みと同省では見ている。その



改修（同約二九〇億円）に着手する。

◆JFEスチール、JSWに出資

JFEスチールは六月末にインドの有力高炉メーカーJSWスチール社に資本参加することを発表した。同社はJSW社が実施する第三者割当増資を引き受け一四・九九％の筆頭株主になる。出資額は一千億円を超える見込みとなっている。これは、二〇〇九年一月に両社で締結した戦略的包括提携に基づくもので、まず九月前半をめどに四八〇億ルピー（約九〇〇億円）を出資し、その後一四・九九％の出資比率を維持するため一〇〇〇億〇〇〇億円を追加する予定となっている。インドでは一五％を超える出資には株式公開買付（TOB）が必要になるため、一五％以下の出資に抑えたとされる。さらに、同社は自動車用鋼材と製鉄所の操業改善の二分野に関する技術供与契約もこの度結んだ。自動車鋼材分野の協力は、自動車用熱延・冷延鋼板技術の供与に加えて、原板供給や製品開発、顧客向けサービスの共同実施などを行なう。操業改善はJSWの主力生産拠点であるビジャナガル製鉄所で実施し、省エネ・環境分野を始め、品質・歩留まり改善に関する技術を供与する。

JFEスチール以外の日本高炉企業は、新日鉄がタタ製鉄との合弁新会社設立に向けて最後の詰めを行なっており、住金はブーシヤン社の西ベンガル州の新製鉄所計画の事業計画を進めている。また、神鋼もエッサール社

結果、鋼材需要は二三八三万トンと〇・六％（一三万トン）減となる。さらに同省では、増加傾向にある在庫を考慮した対応をメーカーに求めている。

◆高炉大手、二〇一〇年度の設備投資額二年連続減

新日本製鉄、JFEホールディングス、住友金属工業、神戸製鉄所の高炉大手が計画する二〇一〇年度の設備投資金額（連結）は、合計で前年度比〇・二％減の約八〇〇億円（前年度八二〇五億円）になる見通しである。四社の合計額は二〇〇八年度に過去最高水準の八六六億円となったが、国内製鉄所の能力増強の一巡などを背景に二年連続で減少する。国内拠点の償却負担を減らしてコスト競争力を強化する動きも減額傾向につながっている。

新日鉄が三二〇億円（前年度比三・〇％減）、住金が一二〇億円（一二・二％減）、神鋼は減価償却費一二〇億円の範囲で計画しており、前年度実績（一二八七億円）を下回る見込みである。JFEは前年度比九・三％増の二四六二億円の計画だが、二〇〇八年度実績に比べて低い水準にとどまる。二〇一〇年度の新規案件では、新日鉄が二〇一二年から二〇一三年にかけて完工を目指す津製鉄所の第二高炉拡大改修（総額約四〇〇億円）、名古屋製鉄所の第五コークス炉新設（同約六〇〇億円）の一部工事を進める予定であり、JFEスチールは二〇一一年一月から西日本製鉄所福山地区で第三高炉の拡大

と自動車用鋼板合弁の提携を念頭に置いている。

◆六月世界粗鋼、二カ月ぶり減

世界鉄鋼協会（WSA）が発表した六月の鉄鋼生産実績によると、六六カ国の粗鋼生産は前月比四・七％減の一億一八七五万六〇〇トン（前年同月比一八％増）と二カ月ぶりに減少した。比重の大きい中国が四・二％減（五三二七万トン）と四カ月ぶりに減少したのに加え、中国以外も五・〇％減（六四九万トン）と二カ月ぶりに減じた。前月に比して日数の減少分以上に生産水準が後退しており、需要の減速が生産面に及んできたものと思われる。六月粗鋼の日産量は六六カ国で前月比一・五％減と六カ月ぶりに減少に転じた。中国の日産量は一・〇％減と二カ月連続で減少し、中国以外では一・九％減と六カ月ぶりに減少した。六六カ国の製鋼操業率は八〇・六％と前年同期比で八・三％高いものの、直近のピークであった四月の八二・六％、五月の八二・〇％を下回った。

二〇一〇年一〜六月の世界粗鋼生産量は前年同期比二七・九％増の七億五八二万トンとなり、金融危機前の二〇〇七年上期実績を約七％上回った。二〇〇七年上期実績と比較して、中国は同三七％増の三億二三一七万トンと過去最高を記録し、中東やインド、韓国なども上回った。一方、EU二七は一七％減、米国が一五％減、日本が八・二％減と、先進国はいずれもいまだ「金融危機前」の八〜九割の水準に止まっている。